学習者の言語経験を豊かにする国語教室

—第１学年の実践を通して—

谷　　栄次

1　小学校における平仮名指導と片仮名指導

(1)　平仮名指導について

平仮名の指導に関しては，小学校の指導要領の第１学年で，平仮名の読み書きが確実にできることをねらいとし，１学期の短い期間に一通りの平仮名の読み書きを学習することが通例となっている。現実は，就学以前に８割以上の子どもたちが平仮名を習得していると言われている。その実態は，注入的・分解的な指導が多く，しかも１～２割の子どもたちは，全く文字指導を受けていない。小学校においても，時間数の問題や一斉指導の弊害として，機械的・注入的・分解的な平仮名の指導が行われがちである。一般的に平仮名提出の順序は，次の３通りがある。

① 書くことの抵抗を少なくするために画数が少なく，字形の簡単なものから提出する。
② 日本語の音節構造の中で母音が特別に重要な位置をもっているので，母音から提出する。
③ 児童の日常生活化した文字から提出する。（例えばあいさつ言葉など）

(2)　片仮名指導について

小学校での片仮名指導を光村図書学習指導書から抜粋すると右記のような表にまとめられる。

学年	指導内容	月	単元の目標
１年生	片仮名の大体を読み，また書くとともに，片仮名で書く語に注意すること	10月 2月	片仮名で書く言葉に興味をもち，片仮名を正しく読んだり，書いたりすることができる。 字形・表記に注意して，平仮名と片仮名の違いに関心をもち，片仮名を正しく書くことができる。
２年生	片仮名を読み，また書くとともに文や文章の中で片仮名の使い方を理解すること	2月	片仮名で書く言葉を集めたり，分類したりする活動に，意欲的に取り組むことができる。 身の回りにある片仮名で書く言葉に興味をもつことができる。
３年生	片仮名で書く語の種類を知り，文や文章の中で適切に使うこと	11月	「書きたいことを分かりやすく（説明書を作ろう）」の単元の中で，よく分かるように言葉を選んで文章を書くことができるとある。

表を見て分かるように小学校では，「読む」ことから「使える」ことになるまでを３年間で完成することになっている。

就学以前の習得状況は，平仮名ほど高くはない。全く書けない子どもも１割程度いる。平仮名よりも個人差が大きいと思われる。平仮名よりも字形が単純で，子どもたちにとっては習得しやすいと考えられる。しかし，どの言葉を片仮名で表すのか理解しにくいという大きな問題がある。

2　本学級での平仮名指導と片仮名指導について

平仮名・片仮名指導を考える際，機械的・注入的・分解的な指導を何とか打破できないものかと考えた。机上の文字指導に終わるのではなく，子どもたち（学習者）の生活の中に文字が「ことば」として生きて働く「平仮名・片仮名」の指導をめざした。本学級では，指導を行うにあたって次のことに留意した。

【平仮名指導の留意点】

○　指導する平仮名の文字の量を子どもたちの意欲と照らし合わせて配慮すること。
○　学習した文字を広げる活動を取り入れていくこと。
○　間違えやすい学習場面では，立ち止まり丁寧な指導を計画的に行うこと。
○　平仮名の読み方・書き方が定着するように，日々の積み重ねを大切にすること。
○　楽しみながら，ことばの力がつくような指導の工夫を考えていくこと。

【片仮名指導の留意点】

○　日常生活と関連づけた片仮名指導を出発点にすること。
○　片仮名の読み方・書き方をしっかり理解できるように，日々の積み重ねを大切にしていくこと。（片仮名の正しい読み書きと平仮名との違い）
○　楽しみながら，ことばの力がつくような指導の工夫を考えていくこと。

3　書く意欲を持たせ，確かな力を身につける平仮名指導の実践

指導する平仮名の文字の量を子どもたちの意欲と照らし合わせて配慮すること。

入門期の平仮名指導は，声を出して読むことから始まる。五十音表を最初に見せてこんなことばを投げかけてみた。

T：「たくさん文字があるけど，似ているものはどれかな？」
C：「いとり」「にとた」「にとこ」「れとねとわ」「はとほ」「めとぬ」「るとろとら」
T：「どうして似ていると思ったの？」
C：「いとりは，一つがこうなって，もう一つがちょっと長いけど似ているから」
T：「簡単に書けると思うのはどの文字だろうか？」
C：「し」「つ」「こ」「く」
T：「難しいのは，どれ？」
C：「ぬ」「ふ」「な」「や」

子どもたちは，文字の字形の特徴を感じ取ることができる。書く指導に入る前にしっかり見る（目にやきつける）ことも効果的だと考える。本学級では，画数の少ない簡単な文字から指導していくことにした。最初の５文字までは，鉛筆の持ち方・書く時の姿勢・よく見て正確に書くこと・ゆっくり丁寧に書くこと・書いた文字を見直すことを課題として毎時間１つずつ提示した。原則として１日１文字を原則としたが，似ている文字は２文字指導することもあった。また授業だけでは書く活動に限りがあるので，家庭学習で平仮名練習を取り入れた。

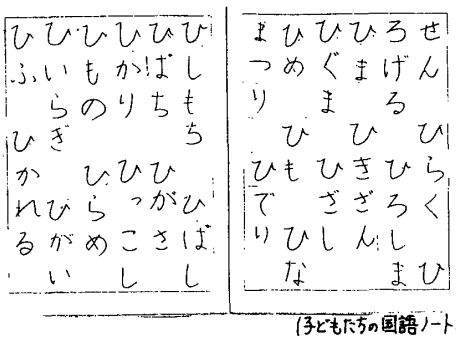
学習した文字を広げる活動を取り入れること（文字からことばに）。

学習した文字から始まることば集めを取り入れた。教室で行った時は，少ない子で５個くらい，多い子で20個くらいのことばを集めることができた。文字にもよるが，家庭学習で行った時は，保護者の協力もあって少ない子で10個くらい，多い子で100個以上集めてくることもあった。

ことば集めの数の平均

「し」から始まることば	平均　１８こ　（最多３４　最少７）
「ひ」から始まることば	平均　２４こ　（最多６４　最少１０）
「す」から始まることば	平均　３９こ　（最多１２３　最少１７）
「る」から始まることば	平均　１２こ　（最多２４　最少６）
「か」から始まることば	平均　２８こ　（最多７２　最少１８）

※小数第一位を四捨五入



（子どもたちの国語ノートから）

間違えやすい学習場面では立ち止まり，丁寧な指導を計画的に行うこと。

子どもたちが間違えやすいのは，どんな場合だろうか。実際に，こんな間違いが見られた。

○「ねとぬ」「れとわ」など字形が似ている平仮名を混同して使う。
○「れとで」「らとだ」など音が似ている平仮名を混同して使う。
○助詞「は・へ・を」と「わ・え・お」の区別がつかない。
○促音「っ」が省かれている。
○濁点を忘れてしまう。
○長音・拗音に抵抗を感じる。
○「ず」と「づ」の使い分けがわからない。
○同じ平仮名が２回続く場合に，１文字だけになってしまう。（例「おおい」→「おい」）

「あさがおの発見カード」や「国語科のワークシート」で，どのくらい間違いがあるのかをまとめものが右記の表である。発見カードを書くにあたっては，書き直しをさせていないものが大半である。子どもたちが書いたものを丁寧に見直してみると次のことが分かった。

書き表したもの まちがいの種類	あさがおの発見カード			国語ワークシート 7月「おはすびこゎりん」	
	5月18日	5月29日	6月11日	NO. 1	NO. 2
字形の似ている平仮名を混同している	1				
音の似ている平仮名を混同している	1				1
「は」と「わ」の区別ができていない	2		2		2
「へ」と「え」の区別ができていない				1	
「を」と「お」の区別ができていない	5	2	2	1	1
「っ」が省かれている	5	4	4	9	2
濁点をわすれている		1		1	
長音の書き表し方がちがう	1		1	1	2
拗音の書き表し方がちがう			1		
同じ平仮名が続く時，一文字で書く				2	
「じ」と「ず」の区別ができていない					5

（学級人数４０人）

◇単なる書き間違いと書き表し方が理解できていない間違いがある。（間違いが全くない・時々間違える・同じ間違いを繰り返す場合で理解の度合いが分かる）
◇間違え方がある程度パターン化している。（促音の間違いの場合，省いてしまう場合と「きまって」を「きっまて」と書き表してしまう順序間違いの２通りがある）
◇助詞の「は・へ・を」や長音，拗音の書き表し方が一般化しにくい。（学習したこと場と同じことばなら正しく書き表すことができるが，前後のことばが違ってくると間違える）

平仮名の文字を覚えることに加えて，促音・拗音・長音など一般化して使えるようになるには，１年生の１学期だけではかなり難しい。発達段階から「一般化する」ことの難しさも考えられる。書いたことばを声に出して確認することや簡単な聴写を繰り返すことで一つ一つ理解させていくことが重要である。（聴写の例「でんしゃで，じゃんけん，あくしゅした」〔拗音・濁点の学習〕）

平仮名の読み方・書き方が定着するように，日々の積み重ねを大切にすること

平仮名の読み書きは，国語科以外の教科でも行う活動である。算数の問題を声に出して読んだり，生活科で観察記録を書いたり，あらゆる場で指導の機会が得られる。

本学級では，月に１つ詩を決めて音読することを継続した。朝の会や国語科の授業の最初に取り入れたことで，平仮名に慣れ親しむことができた。

ことばの学級通信「心をひらく」を発行した。自分のことばが載っていたり，友だちのことばはどんなものか知ろうとしたりして，喜んで読もうとする姿が見られた。

—学級通信「心をひらく」の例—

楽しみながら，ことばの力がつくような指導の工夫を考えること。

朝の会などで短い話をするように心がけている。ある日，右記のような話をした。

その日から私のげたばこに小さな手紙が入るようになりました。「せんせい，おつかれさま」「せんせい，がんばってね」「せんせいは，どうやってかえるの？」などどれもうれしいものばかりでした。他の先生や友だち，上の学年の人にも出したりして，手紙を使ってのことばの交流がその日をきっかけに広がっていった。書かされて書くのではなく，書きたいと思う気持ちにさせることがまさに教師の支援ではないだろうか。

手紙の中のことばには，心がのっている。書いた平仮名が単なる文字や記号ではなく，人の心が感じられるかけがえのない生きたことばに生まれ変わるのである。平仮名の指導がノルマ的な技能学習に偏らないためにも，こういった活動は，有効だと考えられる。書き表された文字には，人の思いや願いがあることを１年生の子どもたちだからこそ感じ取らせることが大切になる。

げたばこポスト

げたばこポストってわかる？前にこんなことがありました。私が学校から帰ろうと思ってげたばこを開けてみると小さな紙が入っていました。「何だろう」と思い見てみると「先生いつもたいへんですね。がんばってください。」と書いてありました。天にものぼるくらいうれしかったです。その子に次の日，「ありがとう。げたばこもポストだね。」というとその子は，照れくさそうににこっと微笑んでいました。

今は，電話によるおしゃべりの時代になってしまって，手紙を書いたり出したりすることが少なくなってきています。少しさみしい気がします。ちょっとした置き紙でも良いのです。手紙をもらったらわくわくするでしょう。かいたひとの顔がうかんできたりして……。教室にレターボックスを置きました。もらって喜ばれる手紙を書く時には，ぜひ使ってみて下さいね。

4　楽しみながら学習する，ことばとしての片仮名指導の実践

(1)　単元名詩画集「音のささやき」をつくろう（9月）

◆単元を設定するにあたって

小学校に入学して1学期に平仮名の全部を2学期には漢字や片仮名を学習し始めることになっている。日常よく目にする文字とはいえ，次から次へと新しい文字習得の学習が繰り返される。（子どもたちにとってはもじもじする結果になりかねない）「1学期にやっとのことで平仮名を覚えて，また新しい文字を覚えるのか。大変だなぁ。」そんな思いだけはさせたくないと願い，この単元を設定した。

この単元は，片仮名との出会いとなる最初の単元である。生活の中にどんな片仮名のことばがあるのかを調べることから学習は始まる。集めたことばを分類することで，どんなことばが片仮名で書き表されているか理解させたい。そして発展的な学習として身の回りでよく聞く「音」を片仮名で表すことを活動として取り入れていく。身近な生活から題材を見つけ，書き表したいと思う気持ちが学習を活発なものにしていくだろう。音を文字で表し，どう聞こえたかを簡単な文で書き表し，詩画集を作る。それを読み合うことで自然に楽しみながら片仮名に接していくことができると考えた。

単元全体の流れ

一次　片仮名に興味を持ち，片仮名で表すことばについて知る。
1 片仮名のことば集めをする。
2 集めた片仮名のことばを分類して，整理する。
二次　学習の見通しを持つ。
3 作品例を見て，詩画集を作ることを知る。（学習計画を立てる）
4 「自然の音」「生活の音」集めをする。
三次　詩画集「音のささやき」を作る。
5 「音」を文字にすることで，片仮名を書く。
6 作品を仕上げる。
四次　学習のまとめをする。
7 作品を読み合い，感想交流する。
（総7時間）

◆この単元でつけたい力

○　片仮名についてのことば集めをし，分類する中でどんなことばを片仮名で表すのか理解できる。（片仮名に対する興味・関心）（片仮名についての知識・理解）
○　聞いた音を文字（片仮名）で書き表すことができる。（片仮名を正確に書く）
○　想像したことを楽しんで，ことばで書き表すことができる。（ことばの力の育成）
○　作品を読み味わい，友だちの良い所を見つけることができる。（学習の喜び）

◆授業の実際

1時間目「かたかなのことばあつめをしよう」

どの程度片仮名を知っているのか確かめるために知っている文字を書かせてみた。結果は，右記の通りである。

どんなことばの時に片仮名を使うかを尋ねた所，魚の名前・犬の名前・飲み物の名前・国の名前などが出てきた。「ではお茶は？」「じゃ日本は？」という意見も出され子どもたちは困惑する結果となった。しかし「どんなことばの時に片仮名を使うのか」という課題意識は，逆に高まることになった。

片仮名の文字数（46文字の中で）

書いた文字数	人　数
46文字全て	5　人
40～45文字	7　人
30～39文字	3　人
20～29文字	16　人
10～19文字	5　人
0～　9文字	4　人
平均文字数27文字（小数第一位四捨五入）	

2時間目　「かたかなってどんなときに使うのだろうか」

子どもたちに片仮名で書くことばを集めてくるように言い，そのことばの中から一つだけを発表した。子どもたちと仲間分けをした所，次のようになった。

〈のりもの〉　ロケット　ボート　ヘリコプター　バス　他
〈どうぶつ〉　ライオン　ハムスター　コアラ　プードル
〈がっき〉　ピアノ　バイオリン
〈きかい〉　ラジコン　ビデオ
〈スポーツ〉　スキー　サッカー
〈たべもの〉　キャンディー　パン　トマト　レモン　他
〈その他〉　インド　ボールペン　ノート　ダイヤ　他

片仮名を使うのは，①動物・植物の名前　②外国の国や人の名前　③外国から日本に伝わってきたことばを書く時に使うことを知らせまとめた。ただスマップなどどれにもあてはまらないものが出たため，混乱してしまう場面もあった。最後に④として「音・声」を提示し，次時へとつなげていった。

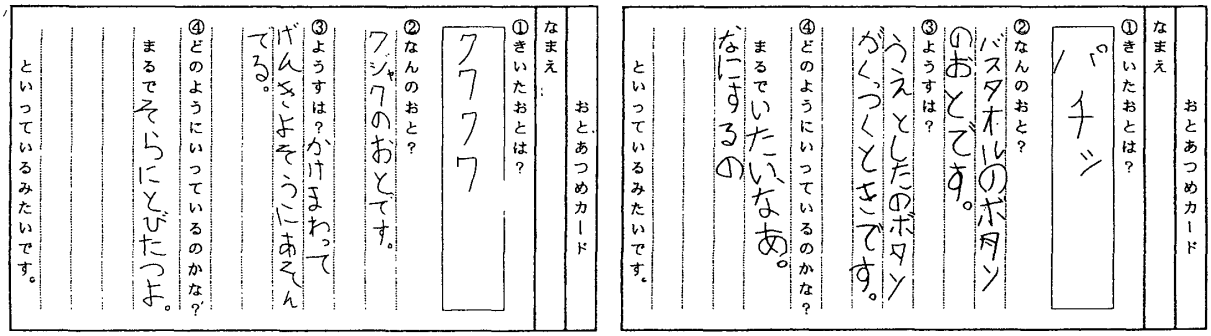
片仮名のことば集め

ことばの数	人　数
100こ以上	6人
80～99こ	4人
60～79こ	3人
40～59こ	8人
20～39こ	3人
10～19こ	10人
0～　9こ	6人
平均　51こ（小数第一位　四捨五入）	

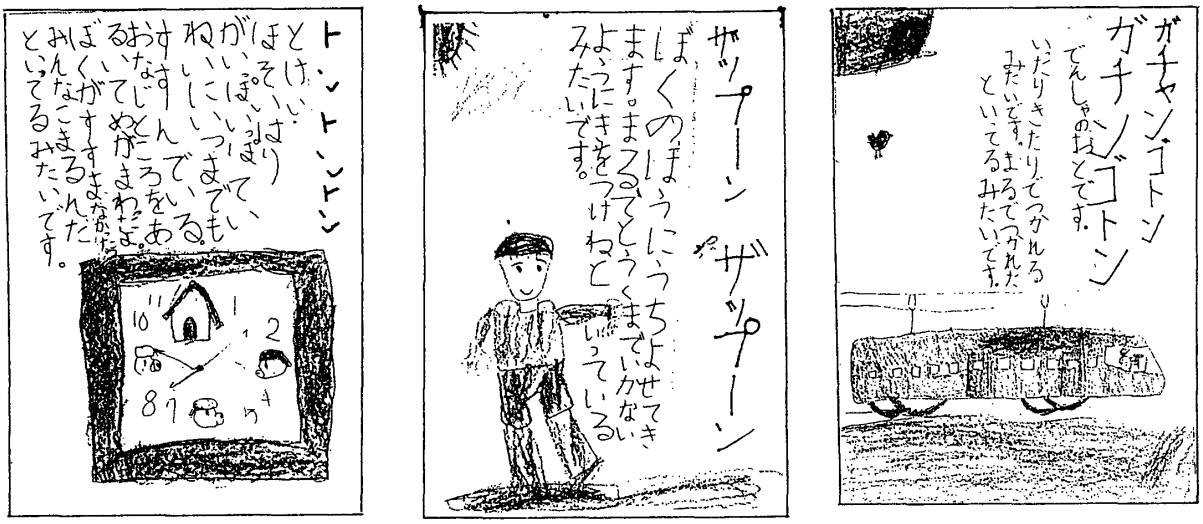
3・4・5時間目しがしゅう「音のささやき」をつくろう

3時間目には，教師が例文を示し，何の音かを想像する活動を取り入れた。4時間目に，音集めカードを記入し，5時間目には，カードをもとにして作品を完成させた。

【子どもたちの音集めカード の例】

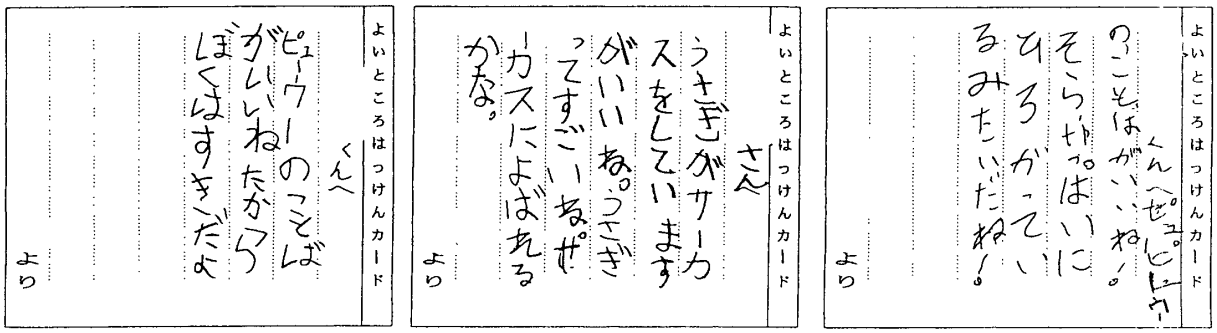


―――― 子どもたちの作品例 ――――



6時間目　「音のささやきをよんでともだちのよいところを見つけよう」

片仮名で書かれた文字に触れる機会を多く取るために，詩画集の読む時間を十分に保障した。そして「発見カード」に友達の良い所を書く活動を取り入れた。技能的な評価に偏らないよう「……のことばがいいね。（できたら理由も）」という文型を示した。まず隣の人に書き，それからは誰に対して書いても良いことにした。

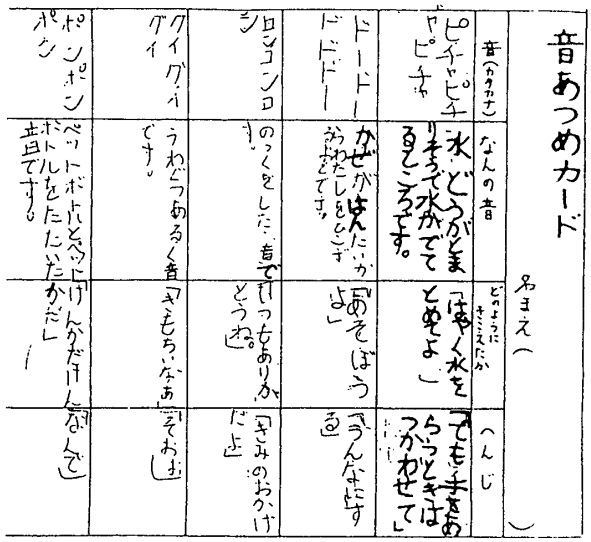


(2)　単元名「音のささやき２」をつくろう（１月）

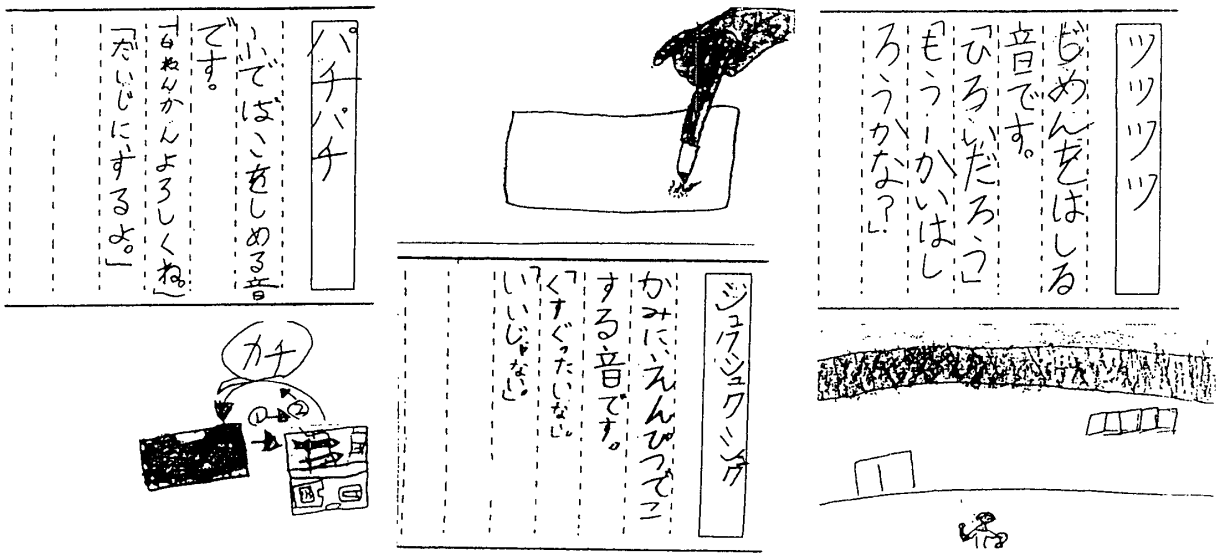
◆単元を設定するにあたって

11月頃から１日に５文字ずつ（行ごとに）片仮名の練習を始めた。その日に学習した片仮名は，必ずもう一度家庭学習として練習することにした。その総まとめとして本単元を設定した。前回と同じような単元にした理由は，２つある。学習方法を理解しているので見通しが持ちやすいこと，聞いた音をことばの世界で表現することは，豊かな言語感覚を培うことに直結することである。前回と違う所は，学校生活の中の音にしぼったこととかぎかっこの文章形態にしたことである。

（右記は，音集めカードの例）



―――― 子どもたちの作品例 ――――



5　実践を振り返って

《個の問題として》

(1)　書く構えについて

「書く構え」をいかにして作るか，このことが重要になることを改めて実感した。「書く構え」とは，「よし，やるぞ」という心の準備・姿勢のことである。平仮名・片仮名というタンクの水を子どもという器の小さなコップにおかまいなしに注いでもあふれるだけである。今までいかに子どもたちに平仮名・片仮名を身につけさせるかを考えてきたが，その前提のいかに「書く構え」を作るかをもっと考えていかなければならない。

(2)　平仮名・片仮名に対する知識・理解について

1年生での平仮名・片仮名の学習は，これからのことばの学習，国語科の学習，すべての教科において基礎的な学力の柱になるといっても過言ではない。それだけに確かな力をつけておかなければならない。この場合の確かな力とは，平仮名・片仮名を読む力・正しく書く力・使いこなす力のことである。1年生の平仮名・片仮名指導を出発点として，繰り返し読む，繰り返し書くことで確かな力をつけていくことができるであろう。

(3)　平仮名・片仮名を使いこなす応用力について

平仮名・片仮名指導を考える時，一文字一文字を正確に読み書きできる力とことばとして使う力の両方をめざしていかなければならない。使う力をつけていこうとする中で表記の問題が出てくる。平仮名の場合，「じ」「ぢ」「づ」「ず」の使い分け，「おう」と「おお」などの長音の問題がそれである。片仮名の場合，外国から伝わってきたことばであるか，日本のことばであるかを区別する難しさが生じてくる。ことばに触れる機会を増やし，その都度立ち止まる丁寧な指導が要求される。

《教師の姿勢として》

(1)　教師の子どもを見る目について

平仮名・片仮名の文字指導は，あくまでも「個の問題」である。文字を使って表現することも「個」によるものである。友達の表現に触れ，相乗効果をねらうことはできるが，一人ひとりに確かな力をつけること抜きでは考えられない。平仮名・片仮名に対する抵抗の原因をつかもうとする時，子ども自身（人間性）まで見つめていかなければならない。つまり，教師の子どもを把握する力・見る目が問われることになる。子どもがとらえることができて，はじめて適切な指導や支援ができる。

(2)　教師のことばかけについて

平仮名・片仮名・漢字と1年生の子どもたちにとって，たくさんの文字との出会いがある。平仮名だけでもかなりの学習量がある。しかも単調な学習になりがちで「意欲の継続」という面で難しさがある。そうした時，教師のことばがけが大切になってくる。ほめことばをできるだけ多く持つこととほめる種をまくことが必要である。教師のことばがけは，子どもたちの学習の潤滑油になる大きな役割を持っている。

「国語科は，道具教科である」ということを聞いたことがある。あらゆる教科において，書くこと・読むこと・聞くこと・話すことが利用され，文字やことばがその媒体とされる。平仮名・片仮名・漢字が1年生で学習されるのも，最も基礎となる「文字の習得」が実現されなければ先に進まないことを意味しているのではないだろうか。心の中を文字にすることのできる喜びは，自己表現をすることでもある。自己表現したものが他者の目に触れ，他者の表現とぶつかり，より輝きを増していく，このことがまさに学習の本質だといえる。